

— Invited Lecture —

## 人権って何？ — 自尊感情を高めるために —

野田 忠司\*

### Understanding Human Rights for Self Esteem

Tadashi NODA

Takatsuki Association for Human Right Development  
M Building 201, Toen 1-1, Takatsuki, Osaka, Japan

(Received December 15, 2014)

**Abstract** This lecture was delivered on late October in 2014 mainly for all freshmen students to cultivate better understanding of what human rights really means. The speaker sent by Takatsuki Association Human Right Development, a Non-Profit Organization supported by the City of Takatsuki, had been teaching at several junior high schools including Teheran Japanese School in Iran. Residing abroad gave him a new perspective; Values vary. Other's sense of value often seems odd but it can also change our mind since what we take for granted is not common in different society and "common sense" in different cultures do make sense for their environment. Once we recognize it, difference would be esteemed highly for each other. Therefore self-esteem could be the prerequisite for universal human rights because it leads respect other's value.

**Key words** — Multi-cultures, Self-esteem, Human Rights, Communication

私は高槻市の中学校で退職するまで教師として仕事をしてきました。「どうすれば子どもの学習意欲を高めることができるのか、どうすれば子どもの人権意識を高めることができるのか」にこだわって教育活動をしてきました。けれども、子ども達の学習意欲と学力も、規範意識や人権意識も、年々弱くなってきていると感じてきました。「勉強しなさい」と言われるだけでは、子どもは勉強しません。「人の気持ちがわかる優しい子どもになりなさい」と言われても、素直に受け入れる子どもは多くいません。教育・保育・子育ては、本当に難しいと思います。

#### (1) 教育改革推進プログラムの策定の仕事 をして感じたこと

私は、2000～2002年に高槻市の教育改革推進プログラムの策定に携わりました。そこで出会っ

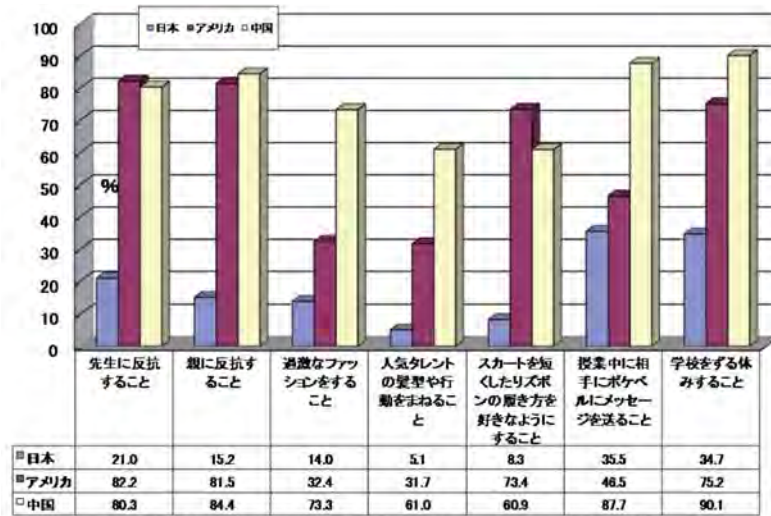
た大学の研究者から「日本の子どもは外国の子どもと比べて意識に大きな特性がある」と聞きました。いろいろなデータを調べ、日本の青少年の意識は外国と比べると、ほとんどの項目で大きな差があり、衝撃を受けました。

例えば、日本の子どもの規範意識はきわめて低いという結果です(資料1)。

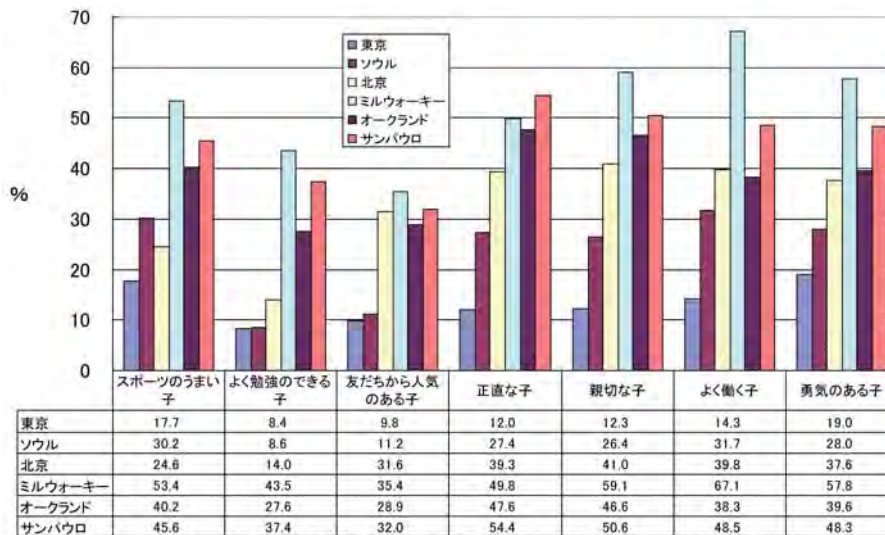
先生や親に反抗することを「いけない」と感じる子どもは非常に少ない。このような実態であれば、学校でも、家庭でも、子育てや教育が難しいのは当然だと思いました。また、日本の子どもの自尊感情が極めて低いという実態(資料2)にも驚かされました。自分に自信がないことは、学習意欲や人権意識を高める上では大きな課題が生じてきます。(資料2)を見てもわかるように、全ての項目で日本の子どもの自尊感情は他国に比べて低くなっています。

日本の子どもの学力は低下してきていると言わ

\* 高槻市人権まちづくり協会 人権啓発指導員



(財団法人日本青少年研究所「ポケットベル等通信媒体調査」1997年3月)  
(資料1)「高校生の規範意識の国際比較『してはいけないと思っていること』」



ベネッセ教育研究所「第5回国際教育シンポジウム報告書」より(平成6年)  
(資料2)「小学生の自己評価～「とてもあてはまる」と答えた割合～」

れていますが、それでもまだ日本は世界でトップレベルの状況にあると思います。にもかかわらず、「自分は勉強ができる」と答えている日本の子どもは非常に少ないのです。

私は、「なぜ日本の青少年の学習意欲が弱くなってきているのか」「なぜ日本の子どもは自分に自信を持ってないのか」、この原因を探りたいと思いました。教育改革推進プログラムの策定が終わったとき、教育次長が「アメリカの日本人学校に行かないか」と声をかけてくれました。私は、文化や環境が日本と全く違う国から、日本の青少年の課題や日本の教育について見つめたいと考え、違う国を希望しました。そして、イランの

テヘラン日本人学校に校長として3年間(2002～2005年)赴任しました。

## (2) 海外から見た日本の人権に関する課題

私が初めて海外を訪問したのは、1985年、フィリピンのスラム街でした。フィリピンは貧しいため多くの子どもが学校に行けないことから、日曜日に路上で勉強を教える活動があり、高槻市の職員労働組合がその活動を支援をしていました。その関係者から「スラムのホームステイに行かないか」と声をかけられました。都市のスラム、農村のスラム、漁村のスラム、3か所でホームステイ

しました。とても貧しい状況でしたが、大人も、子どもも底抜けに明るく、楽しそうに暮らしていることにカルチャーショックを受けました。子どもは学校に行けない、大人も仕事がないという状況でした。けれども、仕事がない世界は、とても面白い世界でした。些細なことが仕事になっていました。タバコを箱売りでなく、バラ売りすれば、一箱売れる間に20人が仕事をするができることを教えられ、驚かされました。スラムでは、お金を貯めるという意識が人々になく、お金の余裕ができた日本人は将来のことを考えてあくせく働いている姿と対照的でした。スラムの人たちが生活を楽しんでいる姿を見て、「日本の子ども達の方が幸せだと言いつけるのか？」と疑問を感じてしまいました。この体験をしていたことが、赴任先にイランを選ばせたのではないかと思います。

イランは5月の中旬から9月末まで乾燥期に入り、ほとんど雨が降りません。ですから、たまに雨が降ると、「今日は良い天気ですねえ」という挨拶が返ってきます。傘を持っていても濡れながらうきうき歩いている人々の表情を見ると、環境が変れば、感じ方も変わると気づきました。交通ルールやマナーの違い、食文化のちがいなど、日本とは異なる異文化の世界でした。

このような状況下で暮らしていると、価値観の違いもわかってきます。日本では「約束の時間を守らない人」「仕事や勉強を一生懸命に頑張らない人」は信頼されなくなりますが、イランではもっと大切なことがあります。それは「家族と一緒に生活を楽しむこと」です。お年寄りも好かれ、尊敬されています。イランでは「家族やお年寄りを大切にしない人」が人として信頼されないのです。学校も、仕事も、お昼過ぎに終わります。午後の2時頃に家族が揃って昼食を食べます。ほとんどの店が午後は閉まります。昼食後は昼寝をして、夕方から家族そろって公園に出かける人が非常に多いです。一部の店は夕方に開きますが、多くの店は閉まったままです。多くの人は家族と余暇を楽しみます。お酒も賭け事も禁止で、人と人との素朴な会話が日常生活の中心です。日本は経済的には成功し、豊かで便利な商品

が溢れていますが、家族と日常の生活を楽しむ姿が、非常に少ないことを実感させられました。仕事が最優先で、時間に追われ、落ち着いて、ゆったりと生活を楽しむ余裕が、日本には見られなくなってきていることを自覚させられました。日本の独居老人の問題が話題になると、質問責めにあい、怒り出すイラン人の表情を見ていると、日本では物質的な豊かさが心の豊かさにつながっていないことを感じずにはいられませんでした。

### 「価値観の多様化」について

仕事が最優先でなく、家族と一緒に楽しむことを大切にしている生活、お酒も賭け事も禁止で、テレビやゲームに影響されず、素朴な会話が生活の中心になっているイランでの生活を体験していると、日本の忙し過ぎる生活、刺激の強い音響と色鮮やかで迫力のある画面のゲーム機など、日本の生活は刺激が強過ぎると感じるようになりました。

私が若い頃は、日本には共通の価値観がありました。「義理と人情」がとても大切にされていました。そして、「仕事も、勉強も一生懸命が大切だ」「人様に迷惑をかけるようなことをしてはいけない」という共通の価値観がありました。子ども達は、教師や親の顔色をうかがいながら、自分の価値観と生き方を学んでいました。「社会や人のために頑張る仕事をする」と多くの子どもの目指す生き方でした。ところが、経済的に成功し、便利で豊かな物質に溢れる時代になりましたが、それに伴って人々の暮らしは魅力あるものになってきているのでしょうか。「価値観の多様化」という言葉がよく使われるようになってきましたが、急速に『よりどころとなる価値観』がなくなりつつあるように感じます。最近では「一生懸命はダサい、かっこ悪い」と答える中高校生が少なくありません。「親の後姿を見て、子どもが育つ」ことも難しくなりつつあります。

私は、「価値観の多様化」という言葉を、多くの子どもや保護者が間違えて受けとめているように感じます。「価値観の多様化だから、本人が好き勝手に良い」と理解しているのではないのでしょうか。保護者も子どもに対して「あなたの好

きなようにしなさい」と言うことが多くなっているようです。スポーツや音楽など、やりたいことがはっきりとしている子どもはそれでいいですが、多くの子どもは、実は何がしたいのか、何を大切にすべきなのか、どう生きていけばいいのか、よくわからずにいるのです。それなのに「好きなようにしなさい」と言われれば、子どもは表面的な楽しさだけを追い求めてしまうのではないのでしょうか。「何を大事にすべきなのか、どう生きるべきなのか」大人が自信をもって、子どもに示すべきだと思います。「援助交際」でさえ「本人が良ければ、いいのではないか」と答える女子高生がいるのを見ると、不安さえ感じます。

中東では宗教を背景に争いが生じているように思われていますが、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教は、信仰する神様は同じで、どの預言者が神の教えを正しく伝えているかによって、宗教の違いが生じています。日本人の多くが神を信じていないことを知ると、「お前は、何を言っているのか分かっていないのか?」と言われてしまいます。何度か、このようなことを言われたことにより、日本は宗教の影響が非常に弱い国であることを意識させられました。中東・アフリカ地区の日本人学校同士の交流があり、私は多くの国を訪問しました。そして、多くの国では宗教が日常生活に根づいており、宗教が子ども達の規範意識を育てていることを知りました。このことから、日本で子ども達の規範意識が育ちにくい課題をどうすべきかを考えなければならぬと感じました。

### 帰国後に学校現場で感じたこと

イランから帰国後、私は9年ぶりに学校現場にもどりました。私が赴任した中学校は子ども達が「荒れ」ていました。生徒の問題行動の多さに教職員は疲れ切っていました。子ども達は学習意欲が弱く、規範意識が非常に弱い状況でした。子ども達の「荒れ」ている背景には、よりどころとなる価値観がないこと、大人に対する不信感の強さがありました。私は荒れている学校を改革するため、「子どもや地域を良くするために、頑張っている大人の姿を見せてほしい」と、PTA 役員

や地域の人たちにお願ひしました。私は毎朝、1時間半ほど校門に立ち、子ども達に挨拶をしました。PTA 役員も、毎日のように校門と一緒に立ち、子どもたちに挨拶をしてくれました。30周年記念事業として、保護者や地域の人たちが講師となり、ドッチボールや野外活動、太鼓、和菓子づくり、太極拳、生け花など、子ども達が選択できる授業をしてもらいました。多くの大人が子ども達のために頑張る姿を見て、子ども達の眼差しは和らぎ、大人に対する厳しい視線や不信感は和らいでいきました。そして、落ち着いた学校に変わっていきました。この取り組みに対して、PTA は文部科学大臣から表彰を受けました。

私はこの経験を通して、よりどころとなる価値観を持ってない子ども達に対して、大人が地域や子どものために頑張っている姿、希望を持って豊かな人間関係をつくろうとしている姿を見せることが大切であることを痛感しました。

### (3) 人権意識を高めるために

#### 日本人は、『なぜ、自尊感情が育ちにくいのか?』

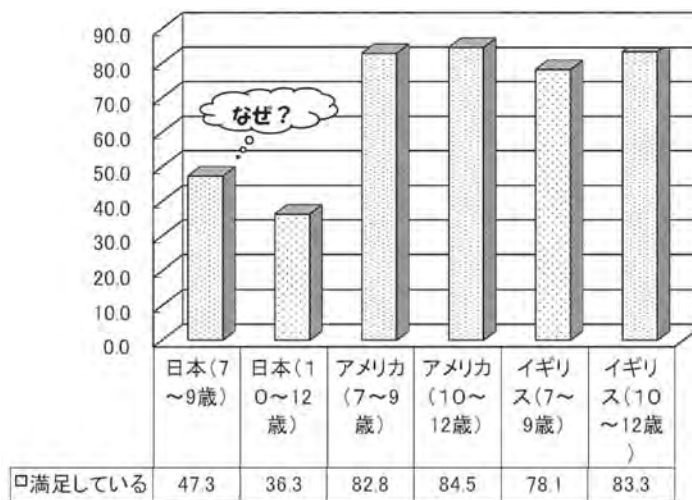
自尊感情が高い子どもは、情緒が安定し、他の人とのトラブルが少ない、規範意識をよく守る、などの傾向が見られます。いじめに屈することも少なく、悪い仲間の誘いを断り、「いやだ」と拒否することができます。逆に、自分を否定的にとらえる自尊感情の低い子どもは、他人も否定的にとらえたり、他人からの言動を被害的にとらえることで、人間関係もうまく成立できなくなり、いじめやトラブルに巻き込まれたり、ねたみや偏見をもち易くなってしまふことも多くなります。従って、子どもの自尊感情を高めること、保護者の自尊感情を高めることを支援することが、子どもの学習意欲を高め、規範意識や人権意識を高めることにもつながると私は思います。

以下の資料は、子どもの成長に対する満足度を比較したものです。日本の保護者の満足度が非常に低いのは、子どもの良さを見るのではなく、マイナス面ばかりを見ているからだだと思います。日本人がよく働くように、日本の親も、子育てを懸

命にやっているとします。しかし、懸命にやっている内容は、よかれと思って、子どものマイナス面ばかりを見て叱咤激励する子育てだと思えます。「褒める」ことが大切だということは、多くの保護者が知識として知っています。しかし、それを実行している保護者は極めて少ないことが、日本の子育てや教育の大きな課題だと思えます。

日本では、子どもが思春期に入る10～12歳になると、満足度が大幅に下がってしまいます。アメリカもイギリスも、思春期に入ると、わずかですが更に上昇しています。子どもの良さを見てい

るからだと思えます。私は、日本では、自分の子どもや家族を「褒める」人が極めて少ないと思えます。自分や家族を褒めないことが風習になっているようにさえ思えます。私は、その状況を変えていく必要があると思えます。褒められず、弱いところばかりを指摘されているからこそ、日本の子どもは自尊心が育たないと思えます。私はよく子どもたちに「あなたの良いところは、どこですか」と聞きますが、ほとんどの子どもは、すかさず「ない」と言い切ります。そして「ダメなところなら、いっぱいある」と答えます。



子どもの成長に満足していると回答した割合  
「家庭教育に関する国際比較調査」(平成6年)

### 自尊心が低いのは、人権が大切にされていない状態である

『自分に自信と誇りを持ってない』『他の人と上手に人間関係を築けない』、このような状態では、自分らしく、楽しく生きることが極めて難しくなります。従って、自分の人権が大切にされていない状態であると思えます。私は教師として人権教育に力を入れてきました。以前は偏見や露骨な差別意識があり、それを無くしていくことが人権教育・人権啓発の主な課題でした。これまでに、差別や偏見をなくすための様々な運動や取り組みがおこなわれてきたことにより、露骨な差別や偏見は減少してきていると思えます。まだ差別が解消したわけではありませんが、私は今日の状態を考えると、人権に関する新たな、大きな課題が生じ

ていると思えます。それは、日本人の自尊心が極めて低いことと、価値観の多様化を間違えて受けとめている子どもや保護者が増えていることです。自分に自信と誇りを持ってない人が多く、他の人との信頼関係を上手く築けない人が多い今日の時代では、自尊心を高め、他の人と豊かな人間関係を上手く築くことができる力を身につけることが人権教育の重要課題であると思えます。

### どうすれば人権意識を高めることができるか

人権意識を高めるためのテクニックを3つ紹介します。

#### ①「あなたメッセージ」でなく「私メッセージ」を使う

「あなたメッセージ」は「あなた」が主語に

なっているメッセージです。これは相手を非難、評価、説教、指示する言い方になるので、相手の自尊心が傷つき、自分をまもるために反発するか、心を閉ざしてしまうことが多くなります。(防御の態勢)。その結果、こちらの言いぶんや気持ちは伝わりにくくなります。「私メッセージ」は「私」が主語になっているメッセージです。相手の行動を非難せず、その行為が自分にどんな影響を与えているのか、そのために自分がどんな気持ちでいるかを伝えるアサーティブなコミュニケーションの手法です。

\* 「あなたメッセージの例」

「あなたはどのようにして、言われたことをすぐにはやらないの!？」

「あなたはいつも、私の言うことを聞かないんだから！」

「また、やってしまったの！あなたは、本当にダメな人だわ！」

\* 「私メッセージの例」

「あなたのしたことで、私はとっても怒っている(困っている)」

「あなたがすぐに…してくれたら、私はとてもうれしいな」

「私は、あなたが…したらどうかな、と思うんだけど」

「私メッセージ」を使えば、相手が感情的に怒ってしまうことをふせぎ、こちらの気持ちを上手く伝えることになり、互いの人間関係を上手く築くことが容易になります。

② 「怒る」のではなく「叱る」ようにすること

感情的に「怒る」ことは、相手の行動によって生じた自分のストレスを発散する上では効果があります。しかし、相手が自分の行動の間違いに気づき、悪かったと感じる気持ちを引き出す上では逆効果になります。大切なことは、相手が悪かったことを反省し、同じ過ちを起こさない気持ちになることです。

「あなた」が主語となる「あなたメッセージ」は、相手の行動を批判するだけでなく、人格さえ否定してしまう言い方に発展してしまいます。そ

して、言わなくてもよいことや、言うてはならないことまで言ってしまいたくなります。相手の行動や発言を私がどう感じたのか、相手にどうしてほしいと考えているのか、その気持ちを伝える表現であれば、相手も比較的素直に受けとめることができます。ですから、「私メッセージ」で語ることが人間関係を上手く築くために有効なテクニックになります。感情的に「怒る」のではなく、できるだけ冷静に「私メッセージ」で「叱る」ことを意識することが良いと思います。

(資料) 『怒る』と『叱る』の違い

「怒る」

感情的に、怒りと勢いで、過去のことで、自分の言いたいように、感情にまかせて、つまり、自分のために

「叱る」

理性的に、愛情と勇気をもって、今後の未来に焦点をあて、相手に伝わるように、感情をおさえて、つまり、相手のために

「叱る」にもコツがあります。基本的な注意は3分以内にする。長く話しても効果はありません。そして、穏やかに話すこと。大声でどなることは自分のストレス解消になるだけで、子どもにとってはマイナスです。

また、「叱る」ときには場所を変えることが効果的です。場所を変える時間を確保することで、親は感情的になっている気持ちを静め、どのように話そうかと作戦をたてる余裕ができます。子どもにも反省の気持ちを引き出す時間的な余裕を与えます。そして、「これからあなたを叱ります」と宣言し、まず「あなたは〇〇をしましたね」と事実確認をします。事実確認ができない場合は、「叱る」ことを延期させることが効果をあげるかもしれません。

③ 「ほめる」こと

子どもの良いところ、がんばっているところを伸ばすためには、ほめることが一番です。ほめられることにより、自信と意欲が高まります。「ほ

めるところがない」と、良く聞きます。しかし、どのような面でも、二面性があります。例えば、「ぐずぐずしている」子どもは「慎重」な子どもであり、「頑固」な子どもは「意志が強い」、「だらしない」子どもは「おおらか」、「おしゃべり」な子どもは「明るい、活発な」子ども、などです。ほめられる子どもは、自信と余裕ができ、自分の悪いところを見つめることも可能となっていくと思います。

#### (4) 私の子育て体験から一まとめにかえて一

最後に、私の子育ての経験からお話したいと思います。

私の次男は、口蓋裂と兔唇の状態で生まれました。生後1年後に唇を縫い、3歳のときに上顎を縫う手術をしました。私は口蓋裂の子どもの多くが神経質で、保護者が暗い表情をしているのを見て、口の周りの様子をからかわれても傷つかないような逞しい子どもに育てたいと決意しました。人権教育に取り組んで学んだことを生かした子育てをしようと思いました。そのため、まず、子どもの「口蓋裂」の写真をアルバムの最初のページに貼りました。そして、小学校1年生のとき、学校で自己紹介をするときにその写真を持っていかせました。私の子どもは「僕はこんな状態で生まれたので、今まで2回の手術をしました」とみんなの前で話しました。このような育て方をしましたので、結構、逞しい子どもに育ってくれました。彼が口のことで馬鹿にされたとき相手を殴り返し、学校から呼び出されたこともありました。彼が高校3年生になったとき「あの時、なんであの写真を持っていかせたん？」と質問され、家族で話し合いました。次男は「口のことで周りから何度もからかわれ、嫌な思いをしてきた。だから、心理学を学び、その経験を生かせる仕事をしたい」と話してくれました。その言葉を聞き、そのような育て方をして良かったと思いました。次男は、家族の感性を育ててくれたと思います。

長女は勉強ができない子どもでした。中学1年生の2学期末テストで英語も数学も10点以下と

いう点数を取りました。そのときから私は、娘と一緒に勉強をつき合うようにしました。高校に行けるようにするためではありません。良い点が取れないことで自信をなくさないように、彼女の良さをつぶされないようにするためです。もし、私が高校に入れる学力をつけさせようとしてきたら、彼女の良さを壊していたと思います。彼女は点数を取ることは苦しみましたが、勉強がわかるようになりたいという意欲は人一倍持ち続けることができました。彼女は短大に進学し、保育士の資格をとりました。卒業するまで、私が一緒に勉強につき合わなければ、単位を取ることができませんでした。成績が悪いために就職できませんでしたが、彼女は十三の駅前の繁華街にある託児所への就職を自力で決めてきました。労働環境としては厳しく、保育士の離職率が非常に高い職場でしたが、彼女は2年半後に託児所の所長になりました。彼女の意欲の強さと、優しさが彼女の道を開いたと思います。彼女を見ていると、「教科学力と生きる学力は違う」と実感しました。彼女は人の気持ちがよくわかる子どもでした。そして、自分に自信をもっていました。本当に必要な力というのは、こうした力なのだと思います。

「ピンチはチャンス」という言葉があります。振り返ってみれば、仕事の上でも、子育てでも、いろいろなピンチがありました。けれども、結果的には、そのピンチがチャンスでもありました。大変な状況に陥ったとき、困難な立場に立たされたとき、逃げないで、ごまかさないで、誠実に向き合おうとすれば、いつも、理解し、支えてくれる人が出てきました。困難な状況に至ったからこそ、普段できないこともやり遂げることができ、新たな道が開けてきたと思います。わが家では次男が口蓋裂だったからこそ、長女が勉強のできない子どもだったからこそ、兄弟の仲が良く、家族の絆を深めることができました。ピンチは、今までできてこなかったことを、改めて実現させられるチャンスでもあります。ピンチをチャンスに切り替えようとする姿勢が、新たな道を切り開くと思います。